

「タイヘンやでエリちー！」

「弁当の鯛が変なの？」

「弁当に鯛持ってくる女子高生って凄いなあ。今度やってみよ……ってなんでやねん！」

「夏場は避けた方がいいわよ」

「うちがツツコミ入れているのに完全スルーするエリちのクールさに惚れそうやわ……もう抱いて」

「〇・〇ー考えらいたしておくわ」

「うわ可能性低っ！」

「それで、なが大変なの」

「わかっているやん！」

「当たり前でしょ。なにかあったの？」

「あのな、この前から準備してた新曲あったやん？」

「ああ、輝夜の城で踊りたい、のことよね。あれがどう考えたの？」

「さっきな、ようやく曲ができたみたいなんや」

「あら、良かったじゃない。真姫、苦勞してたものね」

「ちよっと聞かせてもらったんやけどな、苦勞の甲斐があったのか、凄い曲になっててな」

「へえ、それは楽しみかも」

「覚悟して聞いた方がええで」

「で、そのなが大変なの？」

「この曲な、うちらで完成させるには、ワザが必要やと思ふんよ」

「技術ってこと？ それはでも練習するしか」

「違う違う。もちろんそれも大切やけど、そうじゃなくてもっとこう、感性というか、情熱というか」

「なんだか抽象的ね」

「ぶっちゃけて言うとな、エロスやエロス」

「えろ……え？ 大人っぽいってこと？」

「そうやなくて、そのまんまエロやエロ。エロっぽさが大切やと僕は思う」

「エロ、って。私たちスクールアイドルよ？ それでエロ

なんて」

「ちちち、甘いでエリち。このスクールアイドル群雄割拠に時代、普通なだけじゃあかん。たまには変化球も必要なんや」

「それはわからないでもないけど、エロス、ねえ。そんな歌詞だったかしら」

「歌詞もそうやけどな、曲中のセリフがまたな」

「ああ……今回はセリフ入りにしたのね」

「せや、これがまたなんとも良い感じにエロスで」

「それはあとで確認するとして、それで結局なにがいたいのよ」

「だからやな、この曲を最高のものにするためには、うち
らもエロスを知る必要があると思うんよ」

「つて希、またなにかおかしなことを考えてるんじゃない
でしょうね」

「おかしくないよ、しごくまっとうな発想や。エリち、こ
れから三人でエロスを研究しに行くで。まずはうちら三年
生がお手本を見せなあかん」

「……ああ、それでさつきから希の後ろで、にこが機嫌悪
そうにしてるのね」

「悪そうにじゃなくて悪いのよ！ なんでにこが希の思い
つきに付き合わないといけないわけ!？」

「なに言うてるん、あの曲はにこつちが重要なポジション
なんやで？ むしろ率先していてもいいくらいや」

「だからつてエロスは関係ないでしょエロスは！」

「いやいやいやいや、とくににこつちには紅い薔薇の姫に
なりきつてもらわなあかんからな、姫らしいエロスを体现
してもらわんと」

「ねえ希、あなたもしかしてエロスつて言いたいだけじゃ
ないの？」

「エリち、あんまり鋭いこと言うたらあかんよ？」

「……はあ。それじゃ帰るから」
「帰ったらあかんつてにこつち。これから三人で出かける
んやから」

「出かけないわよ！」

「ふふふ、ここは一度入ったら会長と副会長の許可がない
限り出られない魔の部屋やで」

「ただの生徒会室でしょ。もう、わかったわよ、希、にこ、
行きましよう」

「お、エリち、やっとその気になってくれたんか」

「エロスはともかく、今日は練習も休みだし、たまには出
かけるのもいいかなって」

「だーかーらー！ なんでにこまで巻き込まれてるのよ！」
「いいじゃない。私、そう言えばにこは遊びにいったこ
とほとんどないし。同学年同士、たまには親睦を深めましょ
う」

「おお、エリち、さすがイケメンやね……にこつちもメロ
メロや」

「誰がメロメロよ誰が！」

「じゃ、いきましようか」

「ほらにこつち、行くで」
「だーかーらー！ ちよつと、押すな！ 引つ張るな！
手を繋ぐなー！」

「で、希、どこにいくの」
「そんなん決まっとるやん。うちらがエロスを探求する場
所と言えばただ一つ。我らがホームグラウンド、秋葉原
や！」